

Topic

ドル信仰・ドル稼ぎ
——モスクワでの体験から——

横山 壽 一

ルーブルは今、激しいインフレで急激に価値が低下しており、国内では紙切れ同然に扱われている。他方でドルへの執着は強烈で、深刻化する「物不足」のもとでドル信仰が広く深く進行している。私は、今年7月にソ連へ行く機会を得て、友人と二人でイルクーツク、モスクワ、レニングラードを駆け足で回ってきたが、とりわけモスクワでのドルにまつわるいくつかの体験は、ドル信仰の凄じさを思い知らされるのに十分であった。刻一刻と事態が変化しているソ連では、5ヶ月前の状況などあるいは「過去の出来事」かも知れないが、ドル信仰はととも弱まっているとは思えず、以下に紹介する出来事はその意味で「今ある出来事」と考えてもよからう。

我々が最初にドルと出会ったのは、ホテル内でチャイコフスキー・ホールのチケットを買った時である。ホールのポスターには6ルーブルとあったが、ホテルでは10ドル。当時の旅行者レートは1ルーブル=5円、1ドル=140円であったから、30円で買えるチケットを1400円で買ったことになる。これは、公定レート1ドル=0.57ルーブルが適用されたことによる。旅行者レートは1ドル=27.6ルーブルであったから、これで計算しても10ドルといえば276ルーブルである。我々が聞いたソ連の平均労働者の月収は300~500ルーブルであったから、どれほど高い買物であったかが知れよう。この事態をモスクワ市民の側からみると、仮に街角でチケット1枚をドルで売ることができれば1ヶ月分の賃金を稼いだことになる。こんな美味しい商売を黙っているはずはなく、至る所でドル稼ぎが蔓延することになる。

ホテルを出てすぐに若者が近づいてきた。

「1ドルを30ルーブルで売ってくれ」という。30ルーブルにはさほど驚かなかったが、翌日の夕方、「38ルーブルでどうだ」と言ってきたのにはさすがに驚いた。闇ルートでそのドルをルーブルに交換することができるなら、38ルーブルでも安い買物だということだろう。

モスクワ2日目の晩、ホテルのレストランが閉ってしまい、夕食のできる場所を探さることになった。ゴースト通りを少し入ったところにそれらしき店があり、前で躊躇していると「食事か」と黒スーツの男に声をかけられた。「ここはドル払いだ、ドルを持っているか」という。「持っている」と答えると、「一人25ドルでどうだ、料理は十分サービスする」といって早口の英語でメニューをまくしたてる。「簡単なものでいい」というが、受け付けない様子。ドルを持っていることが分かって、むこうも必死で迫ってくる。「25ドルだと3500円か、ちょっと高いけどいいか」ということになり中へ。料理は確かに豪華で、物不足など関係ないといった感じである。しばらくすると、ボーイが近づいてきた。「キャビアはいらないか」といって、ポケットから隠すように取り出してみせた。値段を聞くと17ドルだという。「いらない」というと離れていった。どの客もドルを持っていることが分かっているから、おそらく毎日声をかけまくっているのだろう。一つでも売ることができれば、それこそ大もうけである。

ロシアホテルからタクシーを頼んだ時、5ドルといわれて「高い、2ドルでどうだ」といったら運転手はすぐにOKした。外国人を見てはドルをふっかける態度に市民の荒廃ぶりを見た思いがして、思わずため息をついてしまった。

(金沢大学経済学部助教授)